

癌で親を亡くした子どもたちをサポートし続ける

参加親子が語る

「AIMSが優しく見守ってくれた」

AIMSは、癌で親を亡くした子どもの支援に取り組むNPO団体。そのグリーフケアプログラムに参加した親子が、苦しみの日々のなかでAIMSと出会い、心に起きた変化や新たな一歩を踏み出すまでを語ってくれました。

【取材・文・撮影●鈴木健太】

苦しみの先に辿り着いた グリーフケアという言葉

片岡さんのご主人・武志さんが、肝臓癌を患って亡くなられたのは、平成29年。悠馬くんが小学3年生のときでした。

「いつかその日が来ると、強い覚悟をしていたつもりでした。ですが、主人が亡くなると、想像を超える悲しみ・苦しみに襲われたんです」と、1年3カ月に渡る闘病生活を懸命に支え続けた片岡さん。

まるで、世界の片隅に家族4人だけ追いやられたような孤独感……。得も言われぬ寂しさに、朝起きたら涙があふれ、仕事中も涙がこぼれてきたといえます。感情に蓋をできない日々が続くなか、なんとか自分の苦しみをやわらげる方法がないか、インターネットで探しました。

「そこで初めて“グリーフ”という言葉を知り、その後に“子どものグリーフケア”という言葉が検索結果に出てきました」。

グリーフとは大切な人との死別・離別などに伴う深い悲しみ・怒りのこと。さらに調べた片岡さんは、癌で親を亡くした子どもにもグリーフケアプログラムを行う、AIMSに辿り着きます。

「主人の死後、悠馬は一度も寂しいと口にしていませんでした。私を苦しませないよう、また悠馬自身が苦しい想いをしないよう感情を抑えていた

のかも知れません。今まで自分のことで精一杯でしたが、悠馬の心は大丈夫か、ふと心配になりました」。

武志さんが逝去されて2カ月後、片岡さん親子はAIMSのグリーフケアプログラムへ初めて参加することに。悠馬くんは、最初に行うみんなの自己紹介で、驚いたことがあったのだそう。

「お父さんやお母さんが死んだことを、包み隠さず話すことにびっくりしました。でも、同じ境遇の子たちだとわかると、なんだか安心できたし、心も通い合える気がしました」。

さまざまな気持ちたちが絡み合っていた、悠馬くんの心。片岡さんは「でも、グリーフケアプログラムで感情を口に出して表現することで、心は解き放たれ、少シラクになったのではないでしょうか」と当時を振り返ります。

感情に蓋をしなくても いい場所がここに

AIMSでは子どもたちのプログラムとは別に、保護者の人たちが喪失体験を話し、分かち合うピアサポートプログラムも別の部屋で開催。片岡さんはそのプログラムで「自身もすぐく救われた」と言います。

「悲しみを背負った人たちの輪に入ると、ひよっとしたら自分の悲しみも深くならないかと心配もしました。でもそれは全くの間違いで、涙ながらに話した自分の喪失体験を、ほか

「AIMSで会えるお友だちとは、
心が通い合える気がしました」

片岡よし子さん

悠馬くん (13歳) *ともに仮名

武志さんが逝去された平成29年から約2年間、AIMSのグリーフケアプログラムに参加。三兄妹の末っ子・悠馬くんは、部活でバスケットボールに励む日々。